

こころの言の葉

～第7集 あふれ出る思い～



平成21年度「こころの言の葉」コンクール作品集
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編

は じ め に

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施している「こころの言の葉」コンクール。本年度の作品集、第七集をお届けします。

これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面で大きな反響をいただいております。今年度は、過去最高の一万二千点を超える「言の葉」が寄せられました。この作品集には、中学生の子から親へ、また、親から中学生の子へ向けられたメッセージが数十編掲載されています。

どの作品も、面と向かつては、気恥ずかしくてなかなか言い出せない思いを素直に綴ったもので、メッセージの行間からは、書き手の思いがあふれてきます。子どもから大人へさしかかる揺れ動くこの時期の中学生の気持ち、そんな子どもたちに戸惑いながらも正面から向き合い、包み込もうとする親の姿には、読む者の心を揺さぶられます。数多くの「言の葉」の中には、自分と同じ「こころ」のメッセージを見出せるものもあるのではないかと思います。

このコンクールには、直接には口に出せない思いを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。みなさんで読んでいただき、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、すばらしい「こころの言の葉」を寄せてくださったすべてのみなさんに、心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

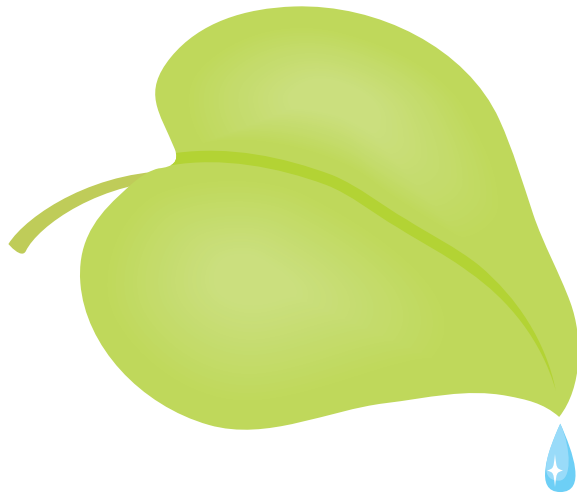
平成二十一年十二月

目次

| | | |
|---------------------|---------------------|----|
| 「格闘」 | ・ ・ ・ 成長の過程 | 3 |
| 「感謝」 | ・ ・ ・ 中学生の子から親への言の葉 | 13 |
| 「包容」 | ・ ・ ・ 親から中学生の子への言の葉 | 23 |
| 「絆」 | ・ ・ ・ 伝え合いたい言の葉 | 33 |
| 「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧 | | 44 |
| 審査員講評 | | 45 |

「格闘」

— 成長の過程 —



僕と母の言の葉ボクシング

僕と母の言葉はボクシングみたいになります。といっても、いつも母の圧勝ですが。母は時々、日常のちよつとした油断を突いてきます。弁解できれば和解になりますが、こんなことはほとんどなく、ボクシングに突入。母は、「何でこんないい加減なことするの！」などの先制パンチ。僕は無言でブロック。これの繰り返しで、こちらの言い分があればすかさずカウンター。しかし、「じゃあ、これはどうなのー？」などの言葉でカウンター返し。母にダメージを与えたことは一度もなく、さらに連続パンチでKO負け。

このようなことで、いつも話を片づける母に僕は言いたい。（確かに母の言葉は正しい。けど、僕の話も聞いてよ！）この言葉すら言えない僕の気持ちを母がいつか気付くと信じています。



息子よ、こいつ！

夏休みの終わり、君は母を見据えてこう吠えた。

「お母さんはいつもきれいごとばかり言って！ 言うこととすることが違うじゃん！

薄っぺらな人生の奴に何を言われても何一つ心に響かねえし！」

母自身、薄っぺらな人生をどうにかせねばと、もどかしく感じながら生きてきた。それが澱（おり）のようにゆらゆらと心に堆積していた矢先の君の苦言、正直、痛かったよ。でも、それ以上に抱きしめたいくらい君の成長が嬉しく、眩しかったよ。“親”を振りかざしたまやかしが通用しないくらい君は成長したんだね。大きな口を叩くからには、君も自らをごまかさず、どっかりと大地を踏みしめて生きていけ。

「息子よ、ありがとう。」今から母のリベンジが始まる。君と切磋琢磨しながら君の誇れる母となる。これからも本気でぶつかってこい！！



比較

貴方はいつも誰かと私を比較する。

「くさんは、こんなことしなかったのにね。」

貴方はいつも姉、兄と私を比較する。

「お姉ちゃんだったらできたのにな。」

比較、ヒカク、比較。いつだって貴方は誰かの影を通して私を見る。

貴方はいつになつたら、私をチョクセツ見てくれるのだろう。

心の中でいつも叫んでいる。モウヤメテ。ダレカトヒカクシナイデ。

いくら叫んでも、私のキモチは伝わらないと分かっているのに。



堂々と

〇〇は、部活をさぼったみたいよと、伝え聞きました。部活動のやり方に不満を持ち、自己主張と称して、我が道を通つ走る息子。我が子に限って……のフレーズが浮かぶ。和を乱すことは、ただのワガママ、自己主張とは違うと、いろいろな言葉を投げ掛けても伝わらず、最後は親子喧嘩に発展。

母として、子どもに気持ち伝わらないことが、残念で仕方なかった。満了で部活を引退し、お別れ会での、あなたは、とても楽しそうで……。もう一度、言葉で自己主張もして、頼もしく思いました。

これからも、度々、形の違う、あなたへの試練が待ち受けています。お母さんは、あなたのポジティブなところが大好き、だからイヤなことから逃げることなく、これからも堂々と生きていってください。お母さんも、あなたとの口論で、いろいろなことを吸収していけたらと思うのです。



嘘

僕はお母さんに嘘をついた。お母さんは、それを信じて、励ましてくれた。

僕は心がキューツとなったけど、嘘をつき続けた。

そして、嘘がばれた。

お母さんは、泣きながら僕のほったをぶった。

痛かったけどがまんした。

それから長い間ガミガミとしかられた。僕はうざいと思った。

お母さんは「なぜこんなに怒るかわかる？」と聞いてきた。

僕は「腹が立つから」と答えた。

そしたらお母さんは「あなたのことが大事だから。平気で嘘をつける人間に、なってほしくないから」と言った。

僕は涙が出た。

お母さん、ゴメンなさい。もう嘘はつきません。



ゆとりをもつて……

「いつもきれいごとばかりいうんだね。」娘が、初めて私の意見を否定的にとらえた時だった。

そう、私は一般論を言い、それは正論のはずだったのに……。私の子育ての辞書に記載されていない展開に、返す言葉を失った。しばらくは「きれいごと」、その言葉が頭から離れなかった。私が親としての理想論を描くたびに、一番大事な娘の気持ち置き去りにされてきていたのだ。その結果、娘は心の居場所をなくしてしまっていたことに気づかされた。

そうだよね。完璧な親などいない。私の悪い所は、反面教師にすればいい……。このことで一番気が楽になったのは私自身かもしれない。これからは娘の心の居場所だけはいつも空けておこう。そして、きれいごとだけでは解決しないこともあることを母の子育て辞書に加えておこう。



心
の
花

ぼくの両親は、いつもぼくの持っている心の花に水をやってくれる。花が枯れているときも、折れているときも、水をやってくれてすぐに元気になる。

でも、ときどきやりすぎることがある。ぼくが元気に満開の花を咲かし、まだ水はいらないってときにも水をやろうとする。すると、なんか少しずつ息苦しくなってくる。息苦しくなって、最後には枯れてしまう。花は、水をやりすぎても、枯れてしまうのだ。

だからお願いです。水はちゃんと、花をみてからやってください。ぼくが枯れてしまわないために。



忘れ得ない日

たぶん一生忘れない。今年、五月二十二日を。

いつも愛用している私のバッグに、そっと置かれた一通の手紙。そこには、私への謝罪の言葉が綴られていた。

前日、いつもより激しい言い争いをしてしまった。原因は、親に反抗的な態度を取ったこと。けれどそんなことは日常茶飯事。この日は更年期にさしかかった私のムシの居所が悪かったのだ。

生まれてきてくれたことに毎日感謝しているはずなのに、あなたを傷つけ、悲しい思いをさせるようなことを次から次へとやってしまった。しかも、自分の中で言い過ぎたと反省していながら、あなたに謝らせていた。涙が止まらなかった。

ごめんね、本当にごめんなさい。姿を見るたびにぎゅっと抱きしめたくなるくらい、ただただあなたが愛おしい。大好きだよ。安心してね。



ほんとうのころ

僕はとても疲れている。

特にこころが疲れている。

ほんとうはこんなこと言いたくないけど……。

ときどき部活で自分の役割、学校での自分の役割に押しつぶされそうになる。

でも、僕は強がりだから「助けて」「手伝って」なんて言えない。

だから、僕のほんとうのころろに気付いたら僕を助けて。

そして、僕がほんとうに頑張ったら

「よく頑張ったね。」

と僕を褒めて。

そしたら僕はもっと頑張れるから。

